

第1回難聴児の早期発見・早期療育推進のための 基本方針作成に関する検討会(2021年3月26日)

難聴児の支援をめぐるコンフリクトから IPE/IPW に向かうための基本姿勢

大沼直紀（筑波技術大学名誉教授・元学長）

- ① 多様性を認め合う
- ② 家族中心の支援
- ③ 専門家の連携
- ④ 幼児期の先を見据えて

●IPE (InterProfessional Education) :
専門職連携教育 (複数の領域の専門職者がケアの質を改善するために互いのことを共に学び合う)

●IPW (InterProfessional Work) :
多職種連携 (複数の領域の専門職者が各々の技術と役割をもとに、共通の目標を目指して協働する)

- ① 物理的バリア（例：車椅子使用者にとっての段差）
- ② 制度的バリア（例：国家資格の障害者欠格条項）
- ③ 情報・文化のバリア（例：手話通訳のない講演）
- ④ 心・意識面のバリア（例：障害者への差別的対応）

⑤ バリアフリーが生み出す新たなバリアー

（例：視覚障害者にとって“やさしい”環境であるはずの点字ブロックの道路が、歩行障害者には”やさしくない”環境が増えたと感じられてしまう）

●バリアー →

●バリア・フリー →

●バリアフリー・コンフリクト →（衝突・対立・葛藤）

聴覚障害児のコミュニケーション手段をめぐるコンフリクト

- 聴覚法（オーディトリリー アプローチ）

- 口話法（オーラルアプローチ）

- 手話法（サイン アプローチ）

人工内耳の出現によりさらに新たなコンフリクトが生まれた

- ①手話か人工内耳かの選択に関わって
- ②人工内耳か補聴器かの選択に関わって
- ③乳幼児期から青年期までの療育・教育機関の選択に関わって
- ④聴覚障害児の教育方法の選択に関わって
- ⑤「難聴者」と「ろう者」が求める情報保障の差異に関わって
- ⑥多様な専門家の間の連携問題と関わって
- ⑦国などが進める今後の難聴対策の課題整理に関わって



Der Wilde von Aveyron.

イタル (Itard 1774-1838)
パリ国立聾啞学校に住み込みアヴェロンの野生
児を教育し、聴覚障害児の音声言語教育にも尽
力した耳鼻科医

●イタールとギャローデット（世界初のろう者のためのギャローデット大学を創設）との「手話口話論争」が始まるのは1800年代。それ以降も聴覚・口話か手話かのコンフリクトは止むことなく現在まで続いている。

●聴覚障害者のための仕事や問題解決に気概と熱意ある関係者・組織であるほどに、自らの信念と専門性に自信と“こだわり”を持つものである。

●いきおい他領域との連携の必要性を認識しながらも、利己的に保身となりがちりがちなのは否めない。

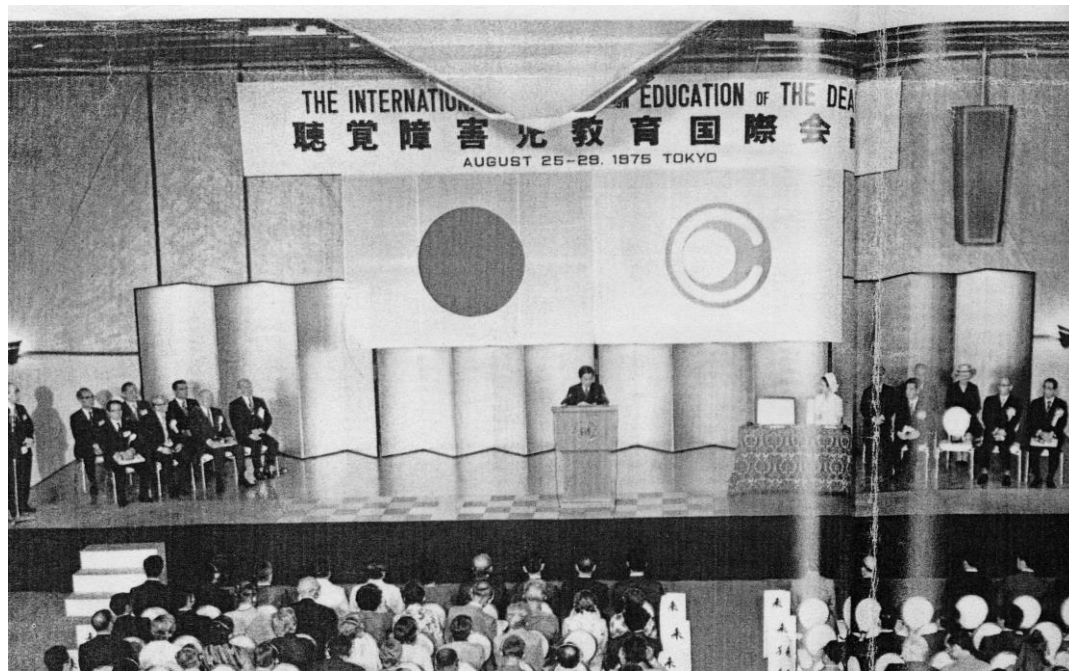
●古今東西、言語・コミュニケーションの補償方法を一つに限定し保守することによりコンフリクトが生じてきた。

聴覚障害児/者のライフステージは
常にコンフリクトに取り囲まれている！

●一生を通して多様な方法が使われるのであるから、言語・コミュニケーションの補償方法を一つに限定しない

- +【表情・ジェスチャー】
- +【聴能(補聴器・人工内耳)】
- +【手話】
- +【読話・口話】
- +【指文字】
- +【文字】
- ...・融通無碍に +【要約/全文提示】

1975年： 聴覚障害教育国際 会議（東京大会）



Dr. S. Richard Silverman

●特別講演
H.デービス博士
R.シルバーマン博士

Hearing and Deafness

FOURTH EDITION

Hallowell Davis, M.D.

S. Richard Silverman, Ph.D.

Central Institute for the Deaf

HOLT, RINEHART AND WINSTON

New York Chicago San Francisco Atlanta Dallas
Montreal Toronto London Sydney

聴覚障害学

□原著第4版□

Hallowell Davis

S. Richard Silverman

編 著

江	口	実	美
大	西	信	治
大	沼	直	紀
賀	戸		久
星	名	信	昭
	共	訳	

協 同 医 書 出 版 社

- Audiologyの世界的な教科書
- 第1版(1947年)～第4版(1978年)
- 大沼らが訳本を出版(1988年)

聴覚医学の教科書(第4版:1978年)に 15章「手話」が入った！

Rachel I. Mayberry, M.S.

手指コミュニケーション

15

誰でも、ある程度は手指コミュニケーション (manual communication) を用いている。われわれは、手招きして人を呼んだり、手を振って合図したり、欲しいものを指さしたり、つかまえた魚の大きさを示したりする。手指コミュニケーションでは、単に手や上腕で情報を送り、目で情報を受取っているのである。口頭言語のメッセージを詳細にするために健聴者が用いる手指コミュニケーションの伝える内容が、その時の周囲の状況に依存している。

聴覚医学の教科書(第4版:1978年)に 20章「聾文化」が入った！

Jerome D. Schein, Ph.D.

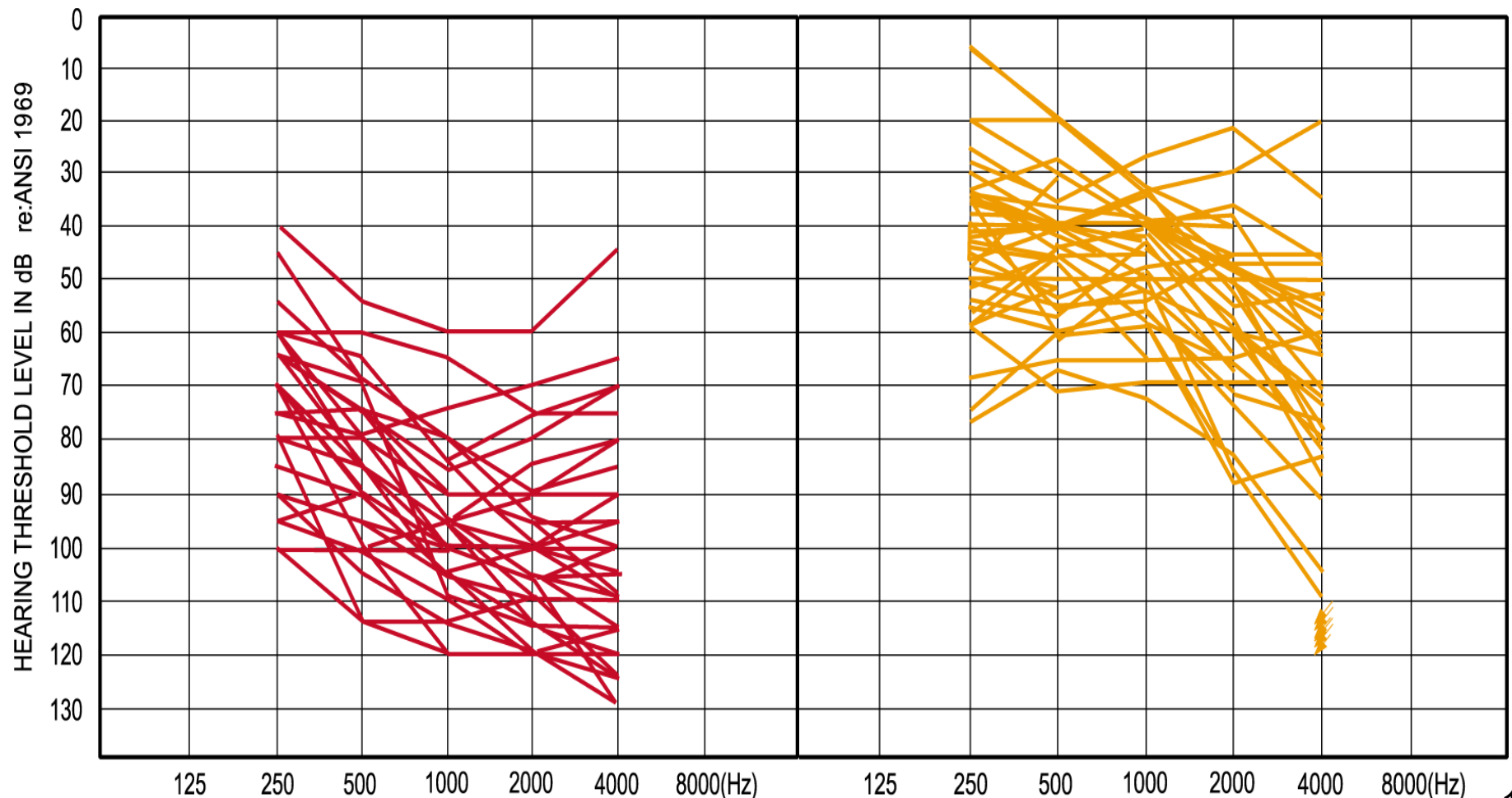
ろうのコミュニティ(地域社会)

20

ろうの多くは、聴力に障害のない人達と接するとき、ひととき強くその障害を意識するものである。コミュニケーションはぎこちなくなる。ろうはきくことができないので、理解することが困難である。そして健聴者にとっては、ろうの話しことばは不備な点や欠けていることがあって、理解しにくいものである。その結果、互いにしばしば消極的になる。さらに悪いことには、社会というものが通常、ろうの処遇に際して辛うじて取繕った敵意や、抑制した恩着せがましい態度を示すことであ

●聴覚障害学生（筑波技大）の裸耳聴力（左図）
と補聴器装用時の聞こえ（右図）

●低域に比べ高域の聞こえが十分でないので「音」
は聞こえるが「言葉」は聞こえにくい



手話をコミュニケーション手段としている最近の多くの聾青年が補聴器も手放さない。「音が聞こえてくる安心感」が理由。補聴器で「音を感じる世界」に、同時に、文字や手話で「言葉を見る世界」に

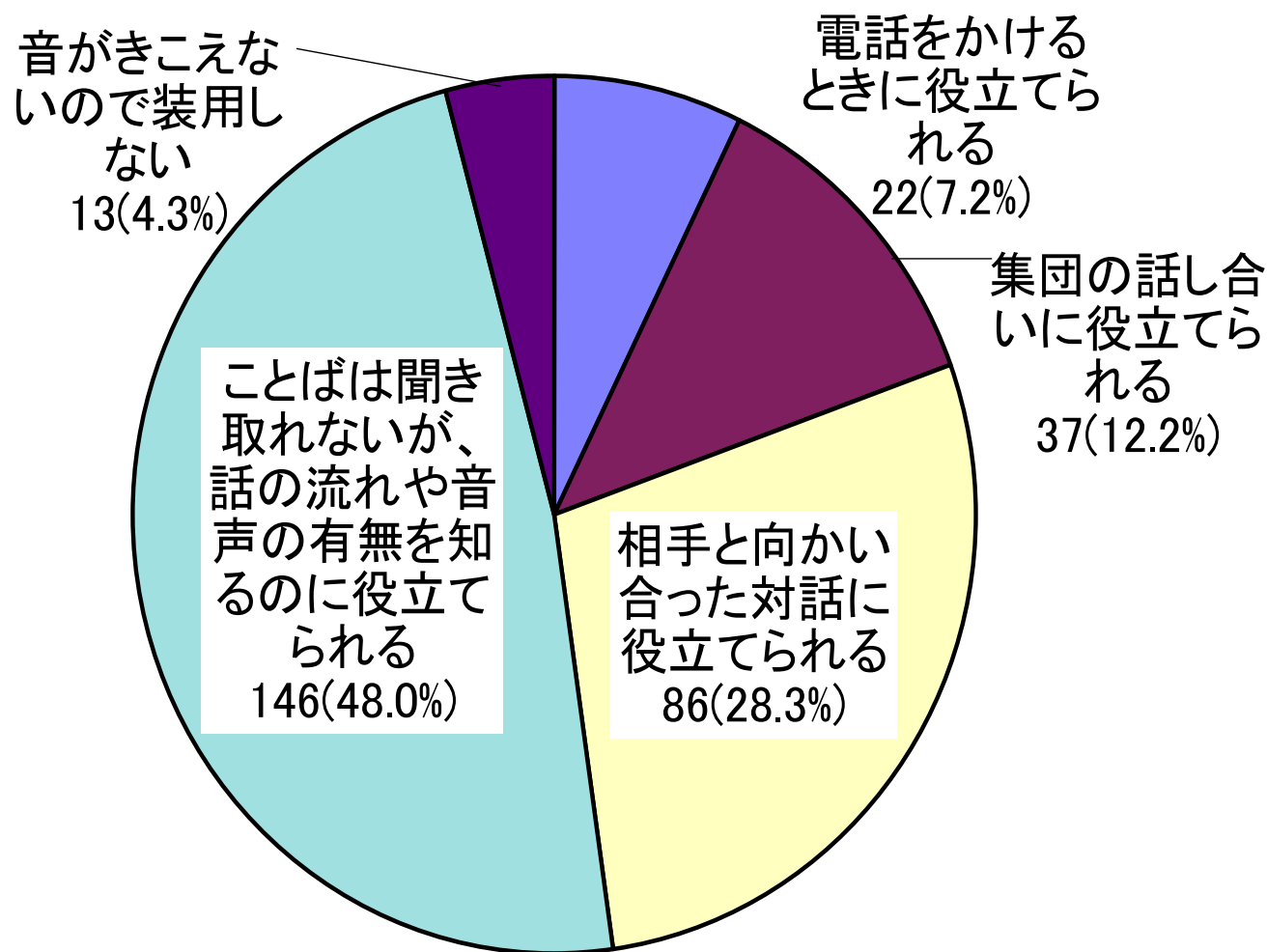


図1 補聴器の活用の程度(n=304)

より高度専門的な情報と
上質な音環境を求めるようになった若者は
もはや「手話」のみでは満足しない

●「手話 + 文字」を

●更に「手話 + 文字 + 音」を

“音楽”を日常楽しむ聴覚障害青年が増えている

●たとえば 残存保有する聴力が 音声(話し言葉)の聞き分けには役立たなくとも、音(物音、環境音、音楽)が聞こえることにより、生活の空間や感性に広がりを見せるという側面が大事

●聴覚法、口話法、手話法など、どのようなコミュニケーション手段が選択されようとも、全ての人に「音」の聞こえが補償・保障されてよい

自らの生き方を「ろう者」とするか「難聴者」とするか

●難聴の程度が中等度や高度であっても、自分に適したコミュニケーション手段が手話であるとする「ろう者」もいる。一方、難聴の程度が非常に重度であっても、補聴器・人工内耳を活用する「難聴者」もいる。

●最近の聴覚障害青年の多くは「ろう者・難聴者」の枠にはまらず、手話も音声も、補聴手段も文字も駆使し、相手や環境に合わせて融通無碍に対応する傾向。

【エピソード】

手話を使うろう者であると同時に、人工内耳で聞き話すNTID学長

●アメリカ国立聾工科大学（NTID）の歴代の学長は手話を使うろう者または耳の聴こえない親を持つCODA

●現学長のバックレイ博士も「ろう者」であり、公的な場では声を出さず手話だけを使い手話通訳者が常時同行

●一方、プライベートな時間は人工内耳を装用し良く聞き良く話す「難聴者」となる

●手話も聴覚口話も、相手や状況に合わせ融通無碍に使い分ける新しいリーダーの姿

●人間は、聞こえる・聞こえないにかかわらず言語を有し、その固有の言語がその人のアイデンティティを形作る。

●特に、聴覚障害問題に関わるステークホルダー（当事者も専門家も）がコミュニケーションモード（音声、手話、文字）の多様性を認め合わないと、社会の寛容性が失われ、障害者の育ち方・学び方・生き方が辛くなる。

（秋田県立リハ・中澤操先生との対話から）

日本における先進的な 早期療育・教育プログラムの特徴

- 1980年代、国立特殊教育総合研究所のデモンストレーションホームが試行され、筑波大学附属聾学校、日本聾話学校など全国各地の幼稚部で、また小林理学研究所母と子の教室や田中美郷教育研究所など民間施設でも早期両親支援が実施された。
- 「母親法」、「自然法」、「ホームトレーニング方式」などと呼ばれる家族中心指導(family-centered approach)の形態で個々の家庭の持つニーズに合った支援が行われた。
- 優れた教育・療育の専門家の存在が功を奏した。

1980年代の実践から得られた知見

- ① 聴覚に障害のある子供のうちで、いわゆる全聾とよばれるものは少なく、多くの聴覚障害児は何らかの活用可能な残存聴力を有している。
- ② 相当に重度な難聴児であっても、適切な補聴補償と情報保障により情報の受容能力を発達させることができる。
- ③ 健聴児の発達と同じように、乳幼児期からの母子コミュニケーション関係を通じた豊かな経験を重ねることが、後々の言語発達に重要な影響を及ぼす。
- ④ 聴覚を活用する能力は聴覚の補償だけで発達するものではなく、視覚など他の多感覚を併用したトータルなコミュニケーション行動に支えられて伸長する。

- ① 子供の前から話し掛けていますか？
- ② 子供の目の高さで話し掛けていますか？
- ③ 子供の注意があなたに向いているときに話していますか？
- ④ あなたの顔が光を背にしない位置で話していますか？
- ⑤ 子供が自分の話があなたにうまく通じなかったと落胆させないような対応をしていますか？
- ⑥ 繰り返したくさん話しかけていますか？
- ⑦ 目の前の物事をことばに置き換えてあげていますか？

⇧ 初期の親主導プログラムから ⇩

➡ 子供の発達に即して自立的スキルへ向かう

- ⑧ 見えない位置から話しかけられても気づき話し手に近づく子供
- ⑨ ⑩

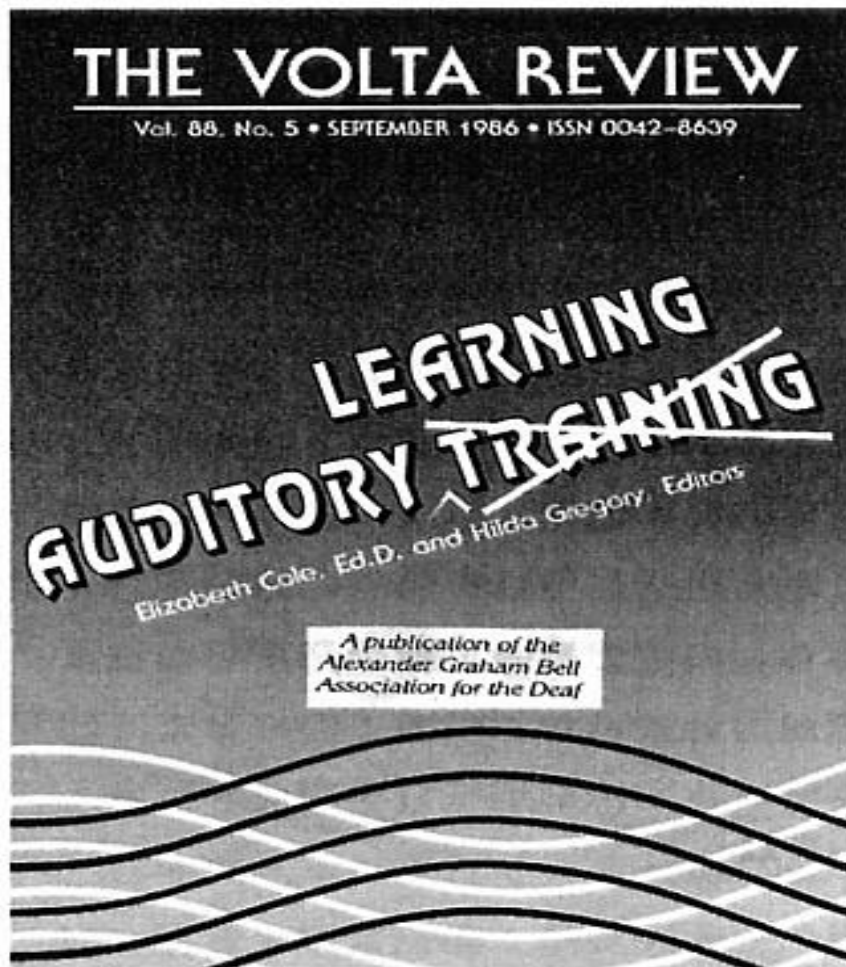
【偶発的学習】

聞こえる子どもは第三者同士の会話を自然に耳にし、そのやりとりから情報を得て、無意識に体験的学習をしている

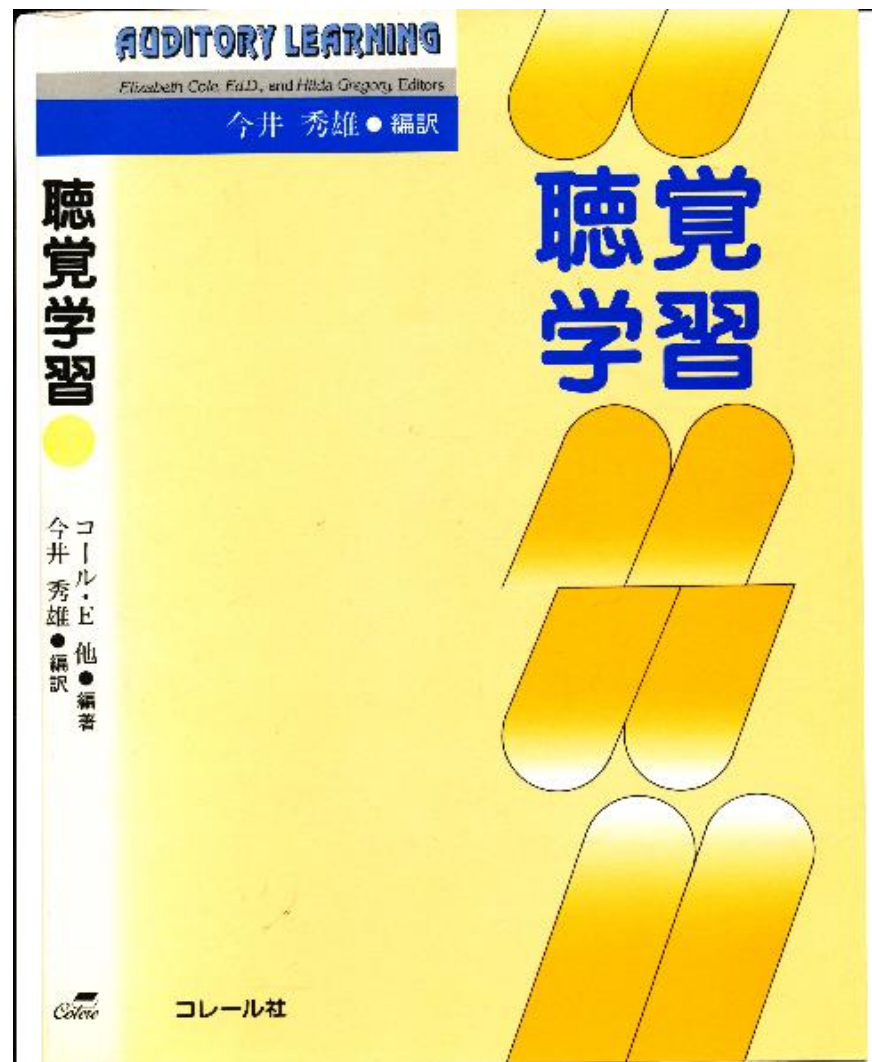
●自分と相手という対話場面では、聴覚活用を含めて様々なコミュニケーション手段を活用して話し合うことができるようになった聴覚障害児/者でも、第三者同士の会話を明瞭に聞き取ることに困難性がある。

●社会生活においても第三者同士の会話が聞き取れないことは大きなハンディになる。

●社会的文脈の学習経験から出来事の概要を類推した上で、誰かに状況を確認するというコミュニケーションスキルは、**早期からの家庭や学校での偶発的学習の経験に基づいて行われる。**



“THE VOLTA REVIEW (ヴォルタ・レビュー)” 誌 (88巻 5号) の表紙



聴能訓練 → 聴覚学習

子どもの成長につれてどの親もが遭遇することになる共通したクリティカルな各ライフステージのイベントを整理し専門家間で共有する

- 新生児聴覚スクリーニングでリファアーとされ診断が確定されたとき
- 聴覚補償の方法とコミュニケーション・モードを選択するとき
- 親が我が子とのコミュニケーションを成立させるのが難しいと悩んだとき
- 他の聴覚障害児と我が子を比べて言葉の発達が遅いのではと焦りを感じる時
- 聴覚障害教育機関か通常の小学校かを選定するとき
- 地域の小学校に入りたいがうまく適応できるか、情報保障はしてもらえるか不安なとき、
-など。

●聴覚障害乳幼児を育てる親の行く手には、子供の成長過程を通じて新たな事態に遭遇し選択を迫られ悩む様々なコンフリクトが待ち構えている。

●多くの親が乳幼児期に巡り合った最初の専門家の助言に救われ、その後の一生を左右するほどの影響を受けている。一方、そのような親によって優れた専門家が育てられる。

●担当者には聴覚障害を取り巻く様々な問題に対応できる資質と専門性が欠かせない。

●教育領域は医療・保健・福祉等の関係機関との連携がますます重要となる。

●聴覚障害児の“育ち方・学び方・生き方”に、先を見据えた切れ目ない支援を

聴覚補償

(補聴器:人工
内耳等により自
らの障害を軽減
改善)

情報保障

(伝わりやすい
環境を周囲が
支援)

ヒアリング/
コミュニケーション
ストラテジー

幼児期の先にあるヒアリング/コミュニケーション・ストラテジーを見据えて

●学童期、青年期に必ず直面する**コミュニケーション・ブレイクダウン**(聞こえなかったり聞き間違いが重なったりすると応答に食い違いが生じ会話が中断してしまう)に備えて

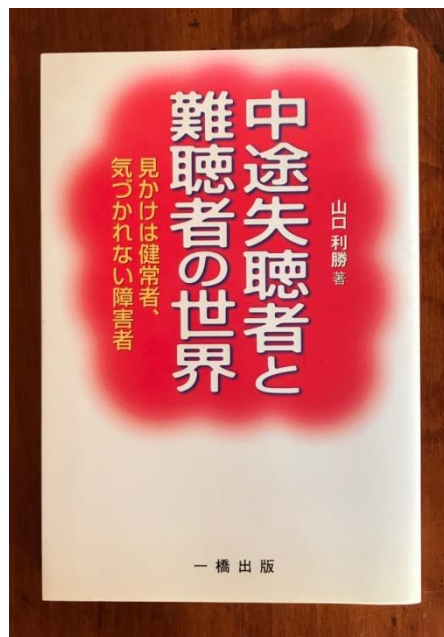
●相手の話が聞こえなかったり分からなかったりした場合に、その事態を修復し会話を継続させるための**コミュニケーションスキルの一つが「訂正方略」**(repair strategy)

●聴き取り能力と**コミュニケーション能力**を自ら高めるためのスキルが身に付くよう、幼児期から先にある切れ目ない目標として見据えておく必要

ヒアリング/コミュニケーション・ストラテジー

- 1) 話し手と周囲の状況をよく見る
- 2) 何が話題なのかを知る
- 3) 話し手にハッキリと話すように頼む
- 4) 話し手が誰なのかが分かるようにする
- 5) 聞き逃しや聞き間違いを修正していく
(訂正方略)
- 6) 話し手に対して積極的に反応を表す
- 7) 聞きやすい見やすい環境を選ぶ
- 8) 問題を見出しその解決に向けて相談できる
キーパーソンの協力を得る

「当事者研究」：自身の障害を分析し、研究する。自らの困りごとを研究対象としてとらえ、似た困りごとを抱える仲間とともにそのメカニズムや対処法を探る。



◆山口利勝

『中途失聴者と難聴者の世界』(2003、一橋出版)



◆熊谷晋一郎・綾屋紗月（石原孝二編）『当事者研究の研究』2013年、医学書院

◆熊谷晋一郎『リハビリの夜』2009年、医学書院

◆熊谷晋一郎（編）『みんなの当事者研究』2017年、金剛出版

- 視覚障害は『人と物』と を繋がりにくくする
- 聴覚障害は『人と人』と を繋がりにくくする
(哲学者カントの言葉をヘレンケラーが英訳)

